

久々の都の雪にかえり顧みる
はしやぐ朝には幼き友と

令和六年二月六日

大中臣正比呂



雪国や被災地の人々には申し訳ないが、雪の朝は何故か心躍り、
童心に帰るのである。其の雪を捕まえようと、雪だるまを作ったり、
カメラは何処かと探し出す。

働き手には憂鬱な朝の筈だが、恋する二人には関係あるまい。